

# 変革の時代、生徒と共に 成長し続ける教師であるために

高校教育、大学教育、そして大学入学者選抜が三位一体となった教育改革が本格的に動き始めた。高校現場では改革をどのように受け止め、変わるうとしていくのだろうか。3人の教師が教育改革への思い、新しい指導法の必要性、そして学校内の意思統一の重要性について語り合った。

## 改革を通して自分が 変わっていく実感

**柏木** 三位一体の教育改革をどのように受け止めていますか。

**黒木** 基本的には、今回の改革が目指す教育の形は、理想の姿なのだろうと思います。中央教育審議会の答申を受けて策定された「高大接続改革実行プラン」が提示されたことで、5年後、10年後を見据えた教育について教師が意見を出し合い、学校全体で考える気運が高まったことは確かです。本校でも、今年度から学校全体でアクティブ・ラーニングの研究に取り組みことになりましたが、異論はほとんど出ませんでした。  
**長谷川** 改革に対する漠然とした不安

はありますが、今のままではいけないという意識が浸透していることも確かです。その意味で、私自身はこの改革は学校を変えるチャンスであり、この機会を逃したら学校として生き残れないという危機感を持っています。私自身、昨年進路指導部長に就任して様々なことを一から勉強していく中で、自分もまだ新しいことを受け入れられる、変わっていくという手応えを感じています。

**佐野** 中高一貫校である本校では、2015年度に初めて高校入試を行い、純粋なりべラルアーツを追究する1クラスをつくりました（P.18参照）。授業はアクティブ・ラーニングが中心で、知識の詰め込みはしない方針を先生方と共有して取り組ん

でいます。ただ、そうした教育が理想だとは分かっても、学校全体で新しい方針や取り組みに共通理解を持つことは、決して容易ではありません。長谷川先生のお話の中で、「自分自身も変わる可能性がある」と感じたというのは、とても重要なことだと思います。本当のアクティブ・ラーニングは、生徒をコントロールするのではなく、何が起るかわからない状況を教師が許容することが大切であり、教師自身も悩みながら生徒と一緒に上げていくものだと思います。今まさに変わっているという感覚を認識し、それを開示する姿勢は、アクティブな授業をつくる上で必要不可欠な要素ではないでしょうか。

**宮城県利府高校**

**長谷川弘和**

はせがわ・ひろかず  
教職歴12年。同校に赴任して6年目。進路指導部長。担当教科は英語。



## 生徒たちに「学習権」を 渡してみる時が来ている

**柏木** 高大接続改革のその先にあるビジョン、つまり、育成したい人材像をお聞かせください。

**佐野** 個別の能力、スキルに生き方を限定されることなく、自分の人生を生き抜こうとし、挑戦できる人になってほしいです。それこそが主体的に生きるということだと思います。

**宮城県利府高校**

- 設立 1984 (昭和59)年
- 形態 全日制 普通科・スポーツ科/共学
- 生徒数 1学年約280人
- 2015年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、宮城大、山形大、福島大などに4人が合格。私立大は、尚綱学院大、仙台大、東北学院大、東北福祉大、宮城学院女子大、帝京大、東海大、日本女子体育大、日本体育大、明治大、明治学院大、立教大、神奈川大などに延べ178人が合格。
- 住所 〒981-0133 宮城県宮城県利府町青葉台1-1-1
- 電話 022-356-3111
- URL <http://ritu-h.myswan.ne.jp>

**宮城県立都城市ヶ丘高校**

- 設立 1869 (明治32)年
  - 形態 全日制・定時制/普通科・理数科/共学
  - 生徒数 1学年約280人
  - 2015年度入試合格実績 (現浪計) 国公立大は、筑波大、名古屋大、大阪大、神戸大、広島大、九州大、熊本大、宮崎大、鹿児島大、北九州市立大、宮崎公立大などに150人が合格。私立大は、中央大、法政大、明治大、早稲田大、立命館大、宮崎国際大などに延べ212人が合格。
  - 住所 〒885-0033 宮城県都城市妻ヶ丘町27街区15号
  - 電話 0686-23-0223
  - URL <http://www.miyazaki-c.ed.jp/miyakononjoizunigaoka-h/>
- 東京都・私立かえつ有明中学・高校  
※学校プロフィールは、P.19参照。

す。どう生きたいのかを自分自身に問い掛け、そのために大学入試が必要ならば、それに挑戦する。そういった内発的な意欲を育む場をどれだけ教師が用意できるかが重要です。

**黒木** これからの人材像は、教え込みによって完成に近付けるものとは一線を画すのでしょね。思考力や判断力、主体性などの全てを高校卒業時まで完全に身に付けさせるのは現実的ではありません。そういった力や姿勢、態度を身に付けるための経験は高校の時から積んで、花開くのは大学や社会に出た時でも遅く



**佐野和之** さの・かずゆき  
東京都・私立かえつ有明中学・高校

教職歴21年。埼玉県私立高校での勤務を経て同校へ。同校に赴任して2年目。教育統括部長。担当教科は理科。

はないという感覚で十分ではないでしょうか。我々教師も完成した存在ではないのですから。

**長谷川** 定められた狭い枠の中での正解、成功を超えて、広い社会の中で他者と協働しながら新しい価値を探し続けることが出来る人が、これからの時代では必要とされているのだと思います。

**佐野** 「ここまで」という枠を決めること自体が、生徒の可能性を狭めることにつながっているのかもしれない。我々教師にも、「高校生はこの程度出来れば十分」という思い



**黒木篤** くろぎ・あつし  
宮城県立都城市ヶ丘高校

教職歴24年。同校に赴任して4年目。進路指導主事。担当教科は地歴・公民。

込みがないでしょうか。しかし、既存の教育のあり方とは違う、別の方法を提示すれば、生徒は際限なく伸びていくかもしれません。そろそろ、私たち教師の手にある「教育権」を、生徒に「学習権」として渡してみよう。時期が来ているのだと思います。

**内面に抱いた違和感が主体性への第一歩になる**

**柏木** 主体的な学びであるアクティブラーニングは、まさに生徒が「学習権」を手にした活動と言えるのではないのでしょうか。

**佐野** 内発的な動機が湧き起こった時に生徒が急速に変わっていく姿を、我々教師は何度も目にしてきました。そうした変革を起こすには、対話を始めた協働作業を通して、生徒が異質な他者と出会ったり、自分自身と向き合ったりする場面を



**柏木崇** かしわぎ・たかし  
『VIEW21』高校版編集長



つくるのが大切です。更に生徒同士が各々の考えを共有することで外界との関係性を築き、そこからもっと話したいという主体的な気持ち萌芽えていきます。そこそがアクティブ・ラーニングの意義だと私は思います。教師はファシリテーターに徹して、外界との関係性を探究する契機となる「トリガー・クエスト」を投げ掛けるなど、生徒たちが主体的に考えられるような場の雰囲気

気を醸成していくことが大切です。

**黒木** アクティブ・ラーニングについて生徒にアンケートを行うと、「同じクラスの友人が、自分とは違う次元で考えていることに驚いた」「これまで考えたことがなかった視点での意見が出てきて面白かった」といった感想がたくさん出てきます。そうした気付きの有無は、教科学力の高さとは必ずしも一致していません。毎時間の授業で、協働的な活動の場面をつくることで、「多様な意見がこの教室では受け入れられる」という安心感が醸成されれば、更に多くの生徒が自分の意見をためらうことなく出すようになると思います。

**長谷川** 私自身も、アクティブ・ラーニングについては勉強を始めたばかりですが、「主体的な学びを支援する」という狙いは、実は今までの授業でも重視してきたことです。全く新しいことを始めるわけではなく、教師がこれまでの経験を生かせば取り組むことが出来るはずですよ。もちろん、失敗することもあるでしょうが、それも私たち自身の課題発見・解決力を高めることにつながればよいと思います。

### 教師同士が不安や悩みを共有することが大切

**柏木** 生徒に学習権を預ける一方、先生方にも課題発見力や解決力が求められるようになった時、実際に現場ではどのように改革を行っていくことになるのでしょうか。

**黒木** アクティブ・ラーニングの研究の気運が高まっている本校でも、アクティブ・ラーニングの研修を呼び掛けた時、反応が芳しくなかった時期がありました。今思うと、授業をアクティブ・ラーニングに完全に切り替えることを求められていると受け止められたのかもしれませんが、そこで、「授業中5分でもよいので、生徒が話し合う場面をつくる努力をしてはどうでしょうか」「失敗しても大丈夫です。軌道修正をしながら、数年掛けて形を整えていきましょう」と呼び掛けたところ、反応が大きく変わりました。先生方の内に秘められた授業改善の意欲を信じ、この1、2年の間に校内で成功体験を共有していければと考えています。

**長谷川** 本校では昨年度、5年後に向けた中期計画を立てる中で、利府

高校の問題点を洗い出し、「何が足りないのか」「どのような生徒を育てるべきか」について、先生方と1年間掛けて話し合いました。その中で、10年後、20年後の社会で活躍できる生徒、主体的に学び、課題発見・解決力を身に付けた生徒を育てるという目標が出来ました。その目標実現のために、授業をどう変えるかが次のテーマになります。先生方との目線合わせは出来たので、今以上にチームワークを意識して学校全体で考えていきたいと思っています。

**佐野** 本校で新クラスを立ち上げた時も、ビジョンや思いを共有することは実は容易ではありませんでした。腹を割って話すしかないと考え、管理職に新クラスの担当者だけが参加する合宿を提案したのです。合宿では、先生同士の関係性を深めるためにペアインタビューを行い、お互いのライフストーリーを共有しました。その上で、現在抱えている不安や悩みなどを洗いざらい語り合ったところ、先生方から「不安なのは自分だけじゃないことが分かった」「すごく安心した」といった声が上がりが始めたのです。そこから空気が一気に

に変わり、新クラスの方向性などについて、ざつくばらんに意見を交わすことが出来るようになりました。

**黒木** 私も似た経験があります。前任校で学校全体での授業改善に取り組んだ時、まずは不安や悩みの共有から始めようと、校長の一声で、午後を丸々職員研修に充てたことがありました。会議の進め方も、研修部が一方的に説明するのではなく、グループを変えながら意見交換を重ねたところ、「目指すところは納得できる」と全員の目線が合ってきたのです。我々教師も、不安や悩みをさらけ出すことで、気持ちが一つにまとまるのだと実感しました。

### 数字で表せない価値を 粘り強く保護者に伝える

**柏木** 校内の意思疎通と共に、保護者や地域への説明も重要ですね。

**佐野** 入学前の学校説明会で「新クラスでは知識の詰め込みはしません」と明言したところ、「それで大入学入試は大丈夫なのか」「放課後の学習指導はないのか」などの質問が

出ました。「私たちは生徒の内発的な動機を大事にし、生徒が必要と考える知識を自分で獲得できるようにサポートします」と説明しました。1学期末には保護者の前で、生徒たちが「このクラスが社会に与えている価値」などのテーマでプレゼンをしました。一生懸命発表する姿を目にして、子どもの成長を実感した保護者も少なくなかったと思います。

**黒木** 言葉による説明だけで生徒の成長を実感させるのは簡単ではありません。本校でも、まずは生徒の姿を見てもらおうと、保護者の前で生徒に課題研究の発表をさせました。その上で、「これからの大学入試では、今日皆さんがご覧になったような力が必要になるので、ぜひ学校への後押しをお願いします」と伝えていきます。進学実績のようなデータで示すことが出来ない将来展望だからこそ、保護者や地域の方々に我々自身の言葉でしっかりと説明し、理解してもらおうことが、今後ますます重要になってくると思います。

**長谷川** 本校の教員が1年間掛けて

体験したように、地域や保護者とも時間を掛けて話し合い、思いをさらけ出すことが必要なですね。アクティブ・ラーニングの研究を含め、やるべきことは山積しています。まさに今、私たちが行動するチャンスなのでしょう。

### 生徒と一緒に場をつくり 共に成長していける教師

**柏木** これからの教師に求められる力は、どのようなものでしょうか。

**佐野** 将来、知識を教え込むだけの教師は必要なくなるでしょう。これからは、生徒が主体性や協働性を発揮できる場をつくる力や、探究のきっかけになるような問いを立てられるスキルが教師には求められると思います。生徒や他の先生方と一緒に授業をつくり、共に成長できる教師であることが大切だと思います。

**黒木** 知識を教える役割から、学び方を教える役割へと変わっていくように思います。ファシリテーターとしてのスキルを磨き、生徒をどのように導いていくのか、どのような

失敗をどう経験させるのかを、授業の中だけではなく、部活動や学校行事などの場面でも考えていくことが大切でしょう。現在は、教師も保護者も過保護になっていて、とにかく生徒を成功させようとする傾向があります。しかしそれは、もしかすると私たち大人が失敗したくないからかもしれない。「失敗を恐れるな」と生徒を励ますのであれば、私たちがまず失敗を恐れない姿を見せるべきです。生徒と一緒にチャレンジしていける教師でありたいです。

**長谷川** 私自身、これまでは大学入試を理由に、教師主導の知識の詰め込みを重要視する面がありました。しかし、生徒に社会の中でどう生きたいのかという志を育み、その実現に必要な力を身に付けるために、大学進学にも目を向けさせた時、高校の学習が生徒主体のものに変化するような気がするのです。生徒がこれからの社会や自分の人生について考える中で、彼らの視野を広げる指導を心掛け、私自身も生徒と一緒に変化し続けたいと考えています。